佳作

香り

イギリス ロンドン日本人学校三年　渡邊 公雅

空港へ到着すると感じる日本の「香り」。僕はこの「香り」でやっと日本へ帰ってきたという実感が湧き、感動するのだ。

電車の香り、バスの香り、旅館の香り、街の香り、祖父の家の香り。どれもがイギリスとは違う日本の「香り」だ。

僕は今十四歳。父親の仕事の都合でアメリカで生まれ、オーストラリアで幼少期を過ごし、今はイギリスで生活をしている。日本に住んでいたのは三年と少ししかない。それなのに僕は日本が大好きで一時帰国が毎回楽しみでしょうがない。なのであのコロナで渡航制限があった時は本当に辛かった。大好きな日本へ行けない辛さ、会いたい人たちに会えない辛さ。ただ渡航制限が解除されて日本へ行けた時感じたあの「香り」。あれは本当に感動だった。

僕は不思議に思う。他の国へ行くとその国の「香り」を日本へ帰った時と同じように感じる。例えば夏にスペインに行った時は真夏の香りがした。トルコに行った時なんかは何とも言えない異国の香りがしたものだ。いわゆる観光地へ行ったり歴史的建造物を見てももちろん感動する。ただ日本へ帰った時の感動とは全く違うのだ。

旅行へ行った時は空港に着いた時とてもワクワクする。それは初めての国がどんな国なのか知らないからワクワクするのは当たり前だ。なのに日本なんかは住んだ事もあるし、一時帰国で何度も行っているのに何故毎回感動してしまうのだろう。

食べ物にしてもそうだ。僕はやっぱり日本の食べ物の「香り」が一番食欲をそそる。寿司の酢飯の香り、お好み焼きや焼きそばのソースのちょっとこげた香り。どれも日本に帰ってきたと実感でき、感動する。「香り」で人はワクワクしたり時には不快に感じたりすることもあるだろう。

きっと僕は安心する「香り」が好きなのだ。もうすぐ大切な人に会える「香り」が好きなのだ。これが僕の「感動」なのである。